

今、何の病気が流行しているか！

【感染症発生動向調査事業から】



KAWASAKI CITY

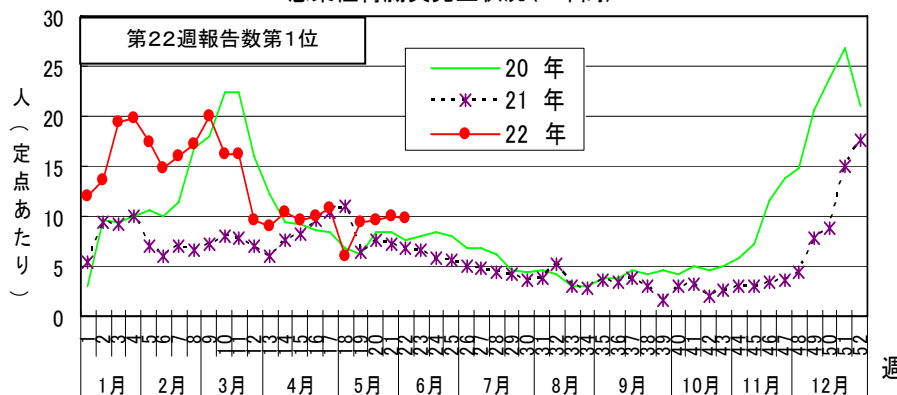
平成22年5月31日（月）～6月6日（日）〔平成22年第22週〕の感染症発生状況

第22週で報告数の多かった疾病は、1) 感染性胃腸炎 2) ヘルパンギーナ 3) A群溶血性レンサ球菌咽頭炎でした。

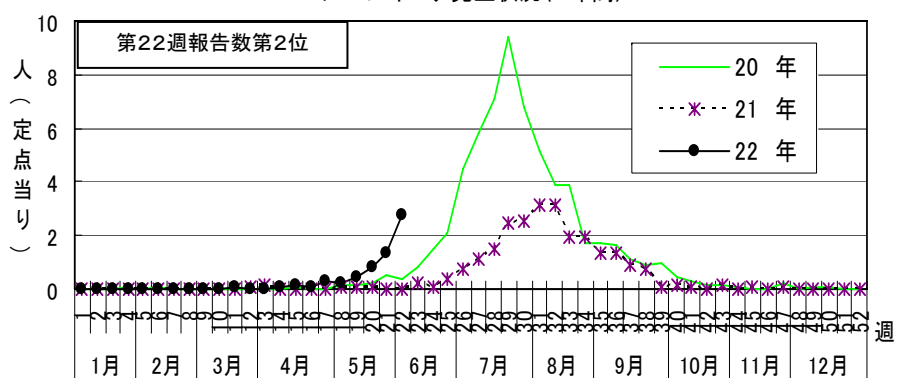
感染性胃腸炎が定点あたり9.79人と前週（10.06人）に比較して患者数はやや減少しております。

ヘルパンギーナは定点あたり2.79人と前週（1.38人）に比較して大幅に増加しており、過去10年間の同時期と比較すると最も高いレベルでの推移となっております。

感染性胃腸炎発生状況(3年間)



ヘルパンギーナ発生状況(3年間)



ヘルパンギーナの報告が急増しています！！

川崎市内において、第22週はヘルパンギーナの報告数が急増しています。特に宮前区と多摩区とともに定点あたり5.6人と流行発生警報基準値（定点あたり6人）に近いレベルとなっています。ヘルパンギーナは、例年7月のピークにかけて4歳以下を中心に流行しますので、今後の発生動向に注意が必要です。

* 症状

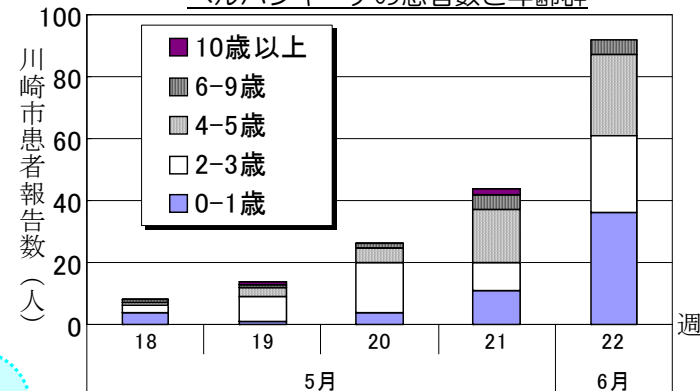
潜伏期間（2～4日）を経過した後に、突然39℃以上の発熱に続いて、のど（奥の方）に直径1～2mm、場合により大きいものでは5mmほどの水疱（みずぶくれ）が出現します。水疱はやがて破れ、浅い潰瘍となり、痛みをとまいません。発熱については2～4日間程度で解熱します。のどの痛みのため、不機嫌、拒食、哺乳障害、それによる脱水症などを起こすことがあります。ほとんどは予後良好です。

～感染しないように

また感染させないように～

感染者のくしゃみやせきで飛び散った唾液や便などに含まれるウイルスによって感染します。見落としがちなのは、感染者が使ったタオルやコップ、またオムツの世話をした後の手などです。便については症状がおさまっても1ヶ月程度ウイルスの排泄が続くことがあるので注意しましょう。うがいや手洗いが重要です。

ヘルパンギーナの患者数と年齢群



上のグラフは、川崎市内におけるヘルパンギーナの最近1ヶ月の定点報告数の推移です。これによると、5月以降、患者報告数は増加傾向にあり、今後も例年のピーク（7月頃）まで患者数が増加することが推測されます。

また、その年齢内訳を見てみると、グラフにある5週間の患者総数184人中168人（約91%）が5歳以下で、特に1歳が最も多く全体の約25%を占めております。